

日英比較と数量詞、否定の問題

小 林 泰 秀

1. はじめに

日本語と英語を比較する場合、一番似ているのは言うまでもなく意味である。*book* と「本」は同じ意味であり、*happy* と「幸福な」は同じ意味である。相違があるとすれば、文化的、習慣的相違によるものがほとんどである。例えば、*house* と云えばアメリカ人は自ら住んでいるような、あるいは通常見る家を想像するだろうし、「家」と云えば日本人は木造の良く見る家を想像するだろう。又、かなりの類似性の見られるのが変形規則であり、音素の面に於いてはかなりの類似性が見られるにもかかわらず、同一性の少ないのが音韻規則である。例えば、p, t, k, b, d, g, m, n 等の子音や、a, i, u, e, o の母音は日英両言語に見られるが、音声を生ずる音韻規則には同じものがほとんどない。(1)～(4)は英語の規則であり、(5)～(7)は日本語の規則である。

(1) 過去形の規則

a. $\phi \rightarrow \emptyset / \left[\begin{smallmatrix} +\text{alveolar} \\ +\text{plosive} \end{smallmatrix} \right] + \text{---}d$

例. $w\acute{o}nt + d \rightarrow w\acute{o}nt\acute{e}d$ 'wanted', $e\acute{n}d + d \rightarrow e\acute{n}d\acute{e}d$ 'ended'.

b. $d \rightarrow [-\text{voice}] / [-\text{voice}] + \text{---}$

例. $l\acute{a}f + d \rightarrow l\acute{a}f\acute{t}$ 'laughed', $l\acute{a}k + d \rightarrow l\acute{a}k\acute{t}$ 'liked'.

(2) 複数形の規則

a. $\phi \rightarrow \emptyset / [+sibilant] + \text{---}z$

例. $p\acute{u}\check{s} + z \rightarrow p\acute{u}\check{s}\acute{e}z$ 'pushes', $k\acute{o}z + z \rightarrow k\acute{o}z\acute{e}z$ 'causes'.

b. $z \rightarrow [-\text{voice}] / [-\text{voice}] + \text{---}$

例. $k\acute{a}p + z \rightarrow k\acute{a}p\acute{s}$ 'caps', $d\acute{e}sk + z \rightarrow d\acute{e}sk\acute{s}$ 'desks'.

(3) 弾音 (Flap) 規則

$\left[\begin{smallmatrix} +\text{alveolar} \\ +\text{plosive} \end{smallmatrix} \right] \rightarrow [+flap] / V \text{---} \left[\begin{smallmatrix} -\text{stress} \\ V \end{smallmatrix} \right]$

例. $b\acute{a}t\acute{e}r \rightarrow b\acute{a}f\acute{e}r$ 'butter', $l\acute{a}d\acute{e}r \rightarrow l\acute{a}f\acute{e}r$ 'ladder'.

(4) 帯気 (Aspiration) 規則

$\left[\begin{smallmatrix} -\text{voice} \\ +\text{stop} \end{smallmatrix} \right] \rightarrow [+aspirated] / \left\{ \begin{smallmatrix} \# \\ V \\ N \end{smallmatrix} \right\} \text{---} \left\{ \begin{smallmatrix} +\text{stress} \\ V \end{smallmatrix} \right\}$

例. p^hort→p^hórt 'port', sévəntin→sévənt^hin 'seventeen'.

(5) 無声母音化規則

$$\left[\begin{array}{c} -\text{acc} \\ \text{V} \end{array} \right] \longrightarrow [-\text{voice}] / [-\text{voice}] \longrightarrow \left\{ \begin{array}{c} [-\text{voice}] \\ \# \end{array} \right\}$$

この規則は特に高母音に見られる。

例. čik^hai 「近い」、kiš^hi 「岸」、Φ^huton 「蒲団」

(6) 過去形の規則

a. $\phi \longrightarrow i/s \longrightarrow +t$

過去形の形態素を /ita/ とし、/s/ の後以外では /i/ を消去するとも考えても良いのであるが、音韻論上 /s/ の次に高母音が挿入される可能性が強いので、/i/ 挿入とする。

例. hanas+ta→hanasita 「話した」、os+ta→osita 「押した」

b. $t \longrightarrow d / \left[\begin{array}{c} -\text{vocalic} \\ +\text{consonantal} \\ +\text{voice} \end{array} \right] + \longrightarrow$

例. oyog+ta→oyogda, yom+ta→yomda, tob+ta→tobda.

但し、kaw→ta→*kawda, kir+ta→*kirda.

c. $[+\text{velar}] \longrightarrow i/ \longrightarrow +[+\text{alveolar}]$

例. oyog+da→oyoida 「泳いだ」、kak+ta→kaita 「書いた」

d. $\left[\begin{array}{c} \alpha\text{stop} \\ \text{C} \end{array} \right] \longrightarrow \left[\begin{array}{c} +\text{alveolar} \\ +\text{stop} \\ \alpha\text{voice} \end{array} \right] / \longrightarrow +[+\text{alveolar}]$

例. kaw+ta→katta 「買った」、kir+ta→kitta 「切った」、yom+da→yonda 「読んだ」、
tob+da→todda.

この子音同化規則は [+consonantal] なものと /w/ に適用されるが、ある方言に見られるように /w/ を子音と考えないと、kaw+ta は kauta→kouta 「買うた」となる。/t/ が $\left[\begin{array}{c} +\text{stop} \\ -\text{voice} \end{array} \right]$ の為、/tat+ta/ にはこの規則が適用されず [tatta] となる。

e. $\left[\begin{array}{c} +\text{voiced} \\ +\text{alveolar} \end{array} \right] \longrightarrow [+nasal] / \longrightarrow +d$

例. tod+da→tonda 「飛んだ」

(7) 複合語に於ける有声化

$C \longrightarrow [+voice] / \dots + \longrightarrow$

例. yama+sakura→yamazakura 「山桜」、oo+kama→oogama 「大がま」。

この規則は実際はもっと複雑であり問題点が多い。čuunakkoo 「中学校」、kootoogakkoo 「高等学校」のように、「が」が [ŋa] と「ga」に発音されるという境界 (boundary) の問題や、matu+kaze 「松風」、hiza+kabu 「膝かぶ」が matugaze, hizagabu となれないという

問題がある。/k/ が /g/ にならないのは、次に /z, b/ 等の有声子音がある為、異化 (dis-similation) によって有声化を起さないと、日野資純氏 (個人的な手紙による) が指摘して下さった。

以上、日本語と英語に独自の音韻規則を必要以上に長く述べてしまったが、この論文では日英両言語に共通、あるいは相違の見られる変形規則を述べ、この論文で議論の中心となる数量詞と否定の問題を、日本語を考えることによって英語の問題点を解決していく。日英両言語に共通、あるいはそれぞれの言語にのみ見られる規則と云っても限りない位あるのであるが、その一部を述べ議論していく。

2. 日英両言語に共通の変形規則

日本語と英語に共通と思われる変形規則は数多く、そのことが言語の普遍性を論ずる根拠ともなっている。

1. 主語繰り上げ (Subject Raising)

補文の主語を繰り上げる規則であり、sentential subject の構造では主文の主語 (Subject-Raising-to-Subject) にし、sentential object の構造では主文の目的語 (Subject-Raising-to-Object) にする。(1a)~(1c)が主語への繰り上がりであり、(1d)~(1f)が目的語への繰り上がりの例文である。

(1a) [John be happy] seems to me→John seems to me (to be) happy.

(1a') [ジョンが幸せである] と私には思われる→ジョンは幸せらしい。

(1b) [John refuse the offer] is relevant→*John is relevant to refuse the offer.

(1b') [ジョンがその申し出をことわる] のは適切だ→同じ。

(1b)の relevant は、いわゆる Factive verb (odd, worry, 等) と呼ばれるもので、繰り上げが出来ず、(1c)のようになる。日本語の場合、この文に於いては語順は問題ではないので、両言語に共通の面は語順よりむしろ補文標識にあると云える。

(1c) That John refuses the offer is relevant. あるいは、For John to refuse the offer is relevant.

(1d) I expect he will come.→I expect him to come.

(1d') 私は彼が来るのを期待する→私は彼に来るのを期待する。

(1e) I regret John is innocent→*I regret John to be innocent.

(1e') 私はジョンが無罪なのが残念だ→*私はジョンに無罪なのを残念だ。

(1b)の場合と同様、Factive verb (deplore, resent, 等) は主語繰り上げが出来ず、(1f)となる。

(1f) I regret that John is innocent. あるいは I regret for John to be innocent.

(1f') 私はジョンが無罪なのが残念だ。

2. 疑似分裂文 (Pseudo-Clefting)

(2a) He learned English at that school→What he learned at that school was English.

(2a') 彼はあの学校で英語を学んだ→彼があの学校で学んだのは英語だった。

(2b) For John to have failed in the test worried him→What worried John was for him to have failed in the test.

(2b') ジョンが試験に落第したことが彼を悩ました→ジョンを悩ますのは試験に落第したことだった。

疑似分裂文は、修飾された名詞句をその文の主語、目的語に出来るという点に於いて、関係節を共なう文に似ている。

(2c) What he gave her was red roses.

(2c') 彼が彼女に与えたものは赤いバラだった。

(2d) The flowers he gave her were red roses.

(2d') 彼が彼女に与えた花は赤いバラだった。

3. 関係節化 (Relativization, or Relative Clause Formation)

(3a) This is a book [Taro bought the book yesterday]→This is the book Taro bought yesterday.

(3a') これが [太郎が昨日本を買った] 本です→これは太郎が昨日買った本です。

(3b) I want to go to a park [I first met her at the park]→I want to go to the park where I first met her.

(3b') 私が [私が公園で彼女に初めて会った] 公園へ行きたい→私は彼女に初めて会った公園へ行きたい。

4. 否定辞繰り上げ (Negative Raising)

(4a) He thinks she is not intelligent→He does not think she is intelligent.

(4a') 彼は彼女が頭が良くないと思っている→彼は彼女が頭が良いと思っていない。

主文の動詞が *factive* だと否定辞繰り上げは起らない。

(4b) He regrets she is not intelligent⇐He does not regret she is intelligent.

(4b') 彼は彼女が頭が良くないのを残念に思っている⇐彼は彼女が頭が良いのを残念に思っていない。

5. 等位構造縮約 (Conjunction Reduction)

等位構造縮約規則に二種類あると考える。一つは従来云われているもの(5a)であり、もう

一つは、いわゆる *each other* 構造を派生すると考えられるもの(5b)である。

$$(5a) \quad \text{S.D.} \quad s[\frac{X-Y-Z}{1 \ 2 \ 3}]_s - \frac{\text{and}}{4} - s[\frac{A-B-C}{5 \ 6 \ 7}]_s \Rightarrow \text{optional}$$

$$\text{S.C.} \quad 1 \quad 2 \quad 4 \quad 6 \quad 7$$

$$\text{状件.} \quad 1 = 5, \left\{ \begin{array}{l} \text{and} \\ \text{or} \end{array} \right\} 3 = 7$$

$$(5b) \quad \text{S.D.} \quad s[\frac{X-Y-Z}{1 \ 2 \ 3}]_s - \frac{\text{and}}{4} - s[\frac{A-B-C}{5 \ 6 \ 7}]_s \Rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \text{optional} \\ \text{obligatory} \end{array} \right\}$$

$$\text{S.C.} \quad 1 \quad 4 \quad 5 \quad 6$$

$$\text{状件.} \quad 1 = 7, \quad 2 = 6, \quad 3 = 5$$

(5a)の規則が適用される文は次のものである。

(5c) John brushed his teeth and John washed his face → John brushed his teeth and washed his face.

(5d) John cooked the lunch and Mary ate the lunch → John cooked and Mary ate the lunch.

(5e) John is similar to Bill and John is similar to Tom → John is similar to Bill and (to) Tom.

次の(5f)～(5h)は(5b)の規則が適用されたものである。

(5f) John played tennis with Mary and Mary played tennis with John → John and Mary played tennis (*with).

前置詞 *with* は次に名詞を共なわない為消去される。これは後で述べる Tough 移動で後に残った *with* を消去しない場合と違う。

(5g) John is similar to Bill and Bill is similar to John → John and Bill are similar (*to).

(5h) John married Mary yesterday and Mary married John yesterday → John and Mary married yesterday.

以上の二つの規則は同一の表層構造を派生する。従って次の(5i)はあいまいであり、(5j)と(5k)のような解釈が出来る。

(5i) John and Mary played tennis.

(5i') ジョンとメアリーがテニスをした。

(5j) John and Mary played tennis together.

(5j') ジョンとメアリーが一緒にテニスをした。

(5k) John played tennis, and Mary played tennis.

(5k') ジョンがテニスをしたし、メアリーもテニスをした。(別々にである)

次の(5l)も(5m)と(5n)に解釈出来る。

(5l) John and Mary married yesterday.

(5l') ジョンとメアリーが昨日結婚した。

(5m) John and Mary married each other.

(5m') ジョンとメアリーが互いに結婚した。

(5n) John married someone yesterday, and Mary married someone yesterday.

(5n') ジョンが昨日結婚したし、メアリーも昨日結婚した。

Lakoff-Peters (1966) によれば、*John played tennis with Mary* のような文は、*John and Mary played tennis* に前置詞付加 (Preposition Adjunction) 規則、前置詞句移動 (Conjunct Movement) 規則が適用されたと考えられている。

(5o) John and Mary played tennis → *John with Mary played tennis → John played tennis with Mary.

動詞によっては、更に前置詞句削除 (Preposition Deletion) 規則も必要である。

(5p) John and Mary married yesterday → *John with Mary married yesterday → *John married with Mary → John married Mary yesterday.

Lakoff-Peters が、前置詞を共なう構造より接続詞を共なう構造を一層深層なものとする理由は、次の文にも見られる。

(5q) John and Mary are alike. (Lakoff-Peters)

(5r) *John is alike and Mary is alike. (Lakoff-Peters)

(5s) *John is alike to Mary. (筆者)

(5t) *John to Mary is alike. (筆者)

(5s)が非文であり、(5q)が文法的であるという理由で、前置詞句付加規則の必要性を正当づけることにはならない。*be alike* は、表層構造の主語に複数形を取るが、前置詞句を取らない動詞である。(5s)はたまたま非文である為、(5b)の等位構造縮約規則が必然的である場合もあると考える。

この論文で筆者は、「ジョンと／にメアリーが……」と「ジョンがメアリーと／に……」が同じ意味だけでなく、日本語では単なる並べかえにより、「メアリーと／にジョンが……」「メアリーがジョンと／に……」も派生され、これらの意味が全く同じであること、つまり、行為者、被行為者ということなく、「お互いに」、あるいは「一緒に」ある事柄をするということと、例えば *marry* という動詞は他動詞である為、*John married yesterday and Mary married yesterday* を深層構造と考えられないという理由から、二つの等位構造縮約規則が

適用されると考える。従って、(5u)と(5v)、(5w)と(5x)は同義である。

(5u) John played tennis with Mary.

(5u') ジョンはメアリーとテニスをした。

(5v) Mary played tennis with John.

(5v') メアリーはジョンとテニスをした。

(5w) John married Mary yesterday.

(5w') ジョンは昨日メアリーと結婚した。

(5x) Mary married John yesterday.

(5x') メアリーは昨日ジョンと結婚した。

marry には動作主と動作を受ける対象物との関係もあるのであるが、ここで(5w)と(5x)が同義なのは、そういう関係がない場合である。

6. 間接疑問縮約 (Sluicing)

(6a) Mary is going to Europe, but I don't know when she is going to Europe→
Mary is going to Europe, but I don't know when.

(6a') メアリーはヨーロッパへ行く予定であるが、私はいつ彼女がヨーロッパへ行く予定なのか知らない→メアリーはヨーロッパへ行く予定であるが、私はいつか知らない。

(6b) Someone visited John, but I don't hear who visited him→Someone visited him,
but I don't hear who.

(6b') 誰かがジョンを訪問したのだが、私は誰が彼を訪問したのか聞いていない→誰かがジョンを訪問したのだが、私は誰か聞いていない。

7. 同一名詞句削除 (Equi-NP Deletion)

(7a) He wanted [he see her]→He wanted to see her.

(7a') 彼は〔彼が彼女に会う〕ことを欲した→彼は彼に会いたかった。

(7b) John persuaded his friend [his friend get up early]→John persuaded his
friend to get up early.

(7b') ジョンは彼の友達に〔彼の友達が早く起きる〕ことをすすめた→ジョンは彼の友達に早く起きることをすすめた。

日英両言語に共通する規則として述べてきたが、両言語に全く同一の規則であるかと云うと問題がある。例えば、(1b)の *John is relevant to refuse the offer* は非文であるが、(1c)の *That John refuses the offer is relevant* とか *For John to refuse the offer is relevant* は正しいという問題は、語順を問題にする場合、日本語には見られない問題である。又、日本語としては疑似分裂がなされるのに英語では非文のものもある。

(2e) *What the train starts is from Tokyo Station.

(2e') その汽車が出発するのは東東駅からである。

(2f) *What he first met her was at that park.

(2f') 彼が彼女に初めて会ったのはあの公園であった。

更に、関係節化にしても、日本語には関係代名詞が表われないからその前置もないのである。「～である所の」というのはいかにも英訳らしい。このように厳密に両言語を比較していくと、同一性の基準に問題はあるが、全く同一の変形規則はその数が数える程しかなくとも知れない。同一性は変形規則だけで論じられるものではなく、あらゆる角度からの比較が必要となる。言語の普遍性の追求は、あらゆる点での同一性の究明にあるのではなく、類似性、個別性の究明にあるのである。

3. 日英両言語に見られるが同一と言えない変形規則

1. 受動化 (Passivization)

(1a) He gave the book to Mary→The book was given to Mary by him.

(1a') 彼はメアリーにその本を与えた→その本は彼によってメアリーに与えられた。

(1a')の日本語の受動文は、いかにも英訳らしく自然な日本語とは云えない。「～によって」を伴い、並べかえ変形によって派生されると考えられる受動文は、単純受動文と呼ばれるのであるが、主題 (Theme)、焦点 (Topic) の問題を考えると、その能動文と意味的に同じと云えないのが日英両言語に共通する問題である。

(1b) Sooseki wrote *Botchan*→*Botchan* was written by Sooseki.

(1b') 漱石が「坊ちゃん」を書いた→「坊ちゃん」は漱石によって書かれた。

(1c) Columbus discovered America→America was discovered by Columbus.

(1c') コロンブスがアメリカを発見した→アメリカはコロンブスによって発見された。

更に、日本語には利害の受動文というのがある。これは「に」を伴い、その深層構造には埋め込み文がある。まず埋め込み文の動詞が他動詞の例を挙げよう。

(1d) 配達夫は〔犬が配達夫にかみつく〕られた→配達夫は犬にかみつかれた。

(1e) 私は〔どろぼうが財布を盗む〕られた→私はどろぼうに財布を盗まれた。

次の例文は自動詞の受動文である。

(1f) 私は〔妻が逃げる〕られた→私は妻に逃げられた。

(1g) 彼は〔雨が降る〕られた→彼は雨に降られた。

又、方向を表わす動詞、つまり、source→goal の関係が成り立つ動詞 (送る、与える、発する、命ずる、等) は、「から」を伴い、「によって」や「に」を伴う必要がない。

(1h) これは田中さんから兄に送られた手紙です。

(1i) 社長から命じられたことには従わなければならない。

以上のように、日本語には英語にはない受動文があるのである。

2. 再帰代名詞化 (Reflexivization)

英語では、再帰代名詞化の一単文内に同一の名詞句がある場合に、どちらか一方の名詞句が再帰代名詞になるのであるが、日本語にはそういう状況はない。

(2a) Mary_i printed a story about Mary_i → Mary printed a story about herself.

(2a') メアリー_i はメアリー_i についての話を印刷した → メアリーは自分についての話を印刷した。

(2a)で *herself* は *Mary* であるが、(2a')の「自分」はメアリーの他に話し手とも考えられる。つまり、「I am saying」「私は～と云っている」が省略されていると考えられるからである。

(2b) Mary_i printed Nancy's_j story about $\begin{Bmatrix} \text{Mary}_i \\ \text{Nancy}_j \end{Bmatrix}$ → Mary_i printed Nancy's_j story about $\begin{Bmatrix} \text{her}_i \\ \text{herself}_j \end{Bmatrix}$.

(2b') メアリー_i はナンシーが $\begin{Bmatrix} \text{メアリー}_i \\ \text{ナンシー}_j \end{Bmatrix}$ について書いた話を印刷した → メアリーはナンシーが自分／彼女について書いた話を印刷した。

Nancy's story は *the story Nancy wrote* と考えられ、英語では *her* と *herself* で指す人物が違うが、日本語では「自分」でも「彼女」でも指す人物に変わりはない。又、次の文に於いて日本語では「自分」も可能となる。日英両言語に於いて *she* もしくは「彼女」はメアリーだけでなく第三者をも指せる。

(2c) Mary believes that she/*herself would win the prize.

(2c') メアリーは彼女／自分が賞を得ると信じていた。

3. 所有格形成 (Possessive Formation) と所有格倒置 (Possessive Shift)

(3a) the book which John has → the book of John's → John's book.

(3a') ジョンが持っている本 → ジョンの (*もの) 本 → ジョンの本

以上の例から、日本語では二つの規則は必要ないのが分る。更に、*of* つまり「の」を「持つ」と訳すのは日本語としておかしい文が多い。しかし、両言語共「所有」の意味はある。

(3b) the tail which the cat has → the tail of the cat's → the cat's tail.

(3b') *その猫が持っているしっぽ → その猫のしっぽ

(3c) parents which she has → parents of she's → she's (her) parents.

(3c') *彼女が持っている両親→彼女の両親。

4. 目的語主語化 (Object-Subjectivization)

この規則は目的語を Dummy subject の位置へ移すものである。

(4a) △grew the corn tall→The corn grew tall.

(4a') とうもろこしを高く伸ばした→とうもろこしが高く伸びた。

(4b) △taste the grapes sweet→The grapes taste sweet.

(4b') ぶどうを甘く味わう→ぶどうは甘い味がする。

以上のように、目的語が目的格であれば、日英両言語共目的語主語化規則が適用される。

しかし、日本語では道具格が主語になれない。

(4c) △opened the door with a key→A key opened the door.

(4c') かぎで戸を開けた→*かぎが戸を開けた。

(4d) △broke the window with a hammar→A hammar broke the window.

(4d') ハンマーで窓を壊した→*ハンマーが窓を壊した。

日本語の場合、道具格でも主語になれるのは、人間に操縦されるもの（車、汽車、船、等）であり、最近では自然の力（風、雲、雪、雷、等）も主語として使われるようである。

(4e) △ran over his dog with a red car→A red car ran over his dog.

(4e') ?赤い車で彼の犬を轢いた→赤い車が彼の犬を轢いた。

(4f) △covered the whole city with snow→Snow covered the whole city.

(4f') *雪で町全体を覆うた→?雪が町全体を覆うた。

(4g) △broke houses with the typhoon→The typhoon broke houses.

(4g') *台風で家々を壊した→?台風が家々を壊した。

(4e')と(4f')の日本語よりも、目的語が主語になる受動文が自然である。

(4h) His dog was run over with a red car.

(4h') 彼の犬が赤い車に轢かれた。

(4i) The whole city was covered with snow.

(4i') 町全体が雪に覆われた。

Houses broke, The door opened, The window closed のように、主語と動詞で正しい文を形成出来る動詞を伴う受動文は、日本語では受動文よりも自動詞の能動文が自然である。

(4j) Houses were broken with the typhoon.

(4j') *家々が台風になで壊された。

(4j'') 家々が台風で壊れた。

(4k) The door was opened with a key.

(4k') *戸がかぎに／で開けられた。

(4k'') 戸がかぎで開いた。

5. 動詞句削除 (Verb Deletion)

(5a) John has been working, and Sally has been working, too→John has been working, and Sally has been, too→John has been working, and Sally has, too→John has been working, and Sally, too.

(5a') ジョンはずっと働いているし、サリーもずっと働いている→ジョンはずっと働いているし、サリーもずっとそうしている→ジョンはずっと働いているし、サリーも（そう）だ。

日本語には英語に見られるような削除はなく、「そうしている」のように代用形が必要になる。最後の「サリーもだ」だけが英語と共通する。

6. 仮定法 (Subjunctive mood)

一つの英語文に対して、日本語では三通りの云い方がある。

(6a) I am not a bird, so I cannot fly to you→If I were a bird, I could fly to you.

(6a') 私は鳥でないから、あなたの所へ飛んで行けない→私がもし鳥だったら／鳥なら／鳥だと、あなたの所へ飛んで行けるのだが。

「たら」は話し言葉であり、「なら、れば」は書き言葉であり、「と」は話し言葉と書き言葉の両方に使われる。日英両言語に仮定法はあるのだが、日本語に於いては、仮定法と条件文 (Conditional sentence) の違いは時制ではなく、語尾の「～なのだが」にある。

(6b) If you turn to the left, you'll see a post office.

(6b') 左へ曲ったら／曲れば／曲ると郵便局が見えます。

4. 日英両言語に別々の変形規則

深層構造と表層構造を見て、日英両言語に同一の変形規則が適用されているのではないかなと思われがちな例を挙げよう。

1. Tough 移動 (Tough Movement)

(1a) For us to please John is easy (=It is easy for us to please John)→John is easy for us to please.

(1a') 我々がジョンを喜ばすのは容易だ→ジョンは我々に喜ばせやすい。

この規則は目的語繰り上げ規則 (Object Raising rule) とも呼ばれるもので、埋め込み文の目的語が主文の主語となる。

(1b) To cut meat with this knife is hard (=It is hard to cut meat with this knife)

→ {Meat is hard to cut with this knife.}
→ {This knife is hard to cut meat with.}

(1b') このナイフで肉を切るのはむづかしい→

{肉はこのナイフで切りにくい。}
{このナイフは肉を切りにくい。}

上の例文から、日本語にも Tough 移動規則が適用されるようであるが、そうではない。日本語の主語の助詞は「は」であって「が」ではない。これは単に名詞を主題化 (Thematization) し、並べかえ規則で前置したと考えられる。日本語に於いては、すべての名詞が主題化され得るのである。従って、日本語では主題化規則の適用と考えた方がよい。

2. 前置詞句前置 (Prepositional Phrase Preposing)

この規則は、VP に支配されている前置詞がその文の前に移動するものである。

(2a) A rich family lived in the house→In the house, a rich family lived.

(2a') 金持の家族がその家に住んでいた→その家に金持の家族が住んでいた。

英語の場合、前置詞が VP に支配されているか S に支配されているかは、前置詞句の中の名詞句が受動文の主語になれるかどうかによる。

(2a'') The house was lived in by a rich family.

VP に支配されない PP には前置詞句前置規則は適用されない。次の文 (2b) の前置詞句は S に支配されている。

(2b) Rich families live in England→*In England, rich families live.

(2b') 金持の家族がイギリスに住んでいる→イギリスに金持の家族が住んでいる。

(2b'') *England is lived by rich families.

以上の例から、日本語は (2b'') の文も可能である為、前置詞句に対し、動詞句支配とか S 支配という区別はない。更に、日本語には前置詞句前置規則という特別な規則も必要なく、語順をかえる単なる並べかえ規則が適用されると考えられる。前にも述べたように、日本語での名詞句前置は、主題とか焦点、更には強調という観点から容易に出来るのである。

3. There 挿入 (There Insertion)

(3a) Tigers are in the zoo→There are tigers in the zoo.

(3a') 虎が動物園にいる→動物園に虎がいる。

(3b) Two books are on the desk→There are two books on the desk.

(3b') 二冊の本が机の上にある→机の上に二冊の本がある。

“There are/is～” は「～がいる、～がある」と良く云われるが、there にその意味があるのではなく、存在、往来の意味を持つ動詞のある文が there で書き換えられるのである。しかし、日本語では単に前置詞句が前に移動したと考えられる。次の (3c') は「～がいる」とい

う日本文では表わせないし、(3d)は場所を表わす副詞がないので、*there* に対する日本語訳は特にない。

(3c) A great king lived in France→There lived a great king in France.

(3c') 偉大な王様がフランスに住んでいた→フランスに偉大な王様が住んでいた。

(3d) A time comes when they need your help→There comes a time when they need your help.

(3d') 彼らが君を必要とする時が来る→同じ。

5. 日英両言語のどちらかにしか見られない変形規則

A. 英語の規則

日本語にはなく英語に見られる規則は多いが、ここではごく一般的な変形規則を挙げる。

1. 与格交替 (Dative Shift)

(1a) I gave a book to Dave→I gave Dave a book.

(1b) He reported the accident to the police→*He reported the police the accident.
say, explain, repeat, speak, report, introduce, describe, announce, mention, talk, suggest

等の動詞の文に与格交替規則が適用されない。更に、その文に見られるように、直接目的語が代名詞の場合もこの規則は適用されない。

(1c) I gave it to Dave→*I gave Dave it.

2. 受益格交替 (Benefactive Shift)

(2a) I bought a book for Mary→I bought Mary a book.

(2b) Answer the question for him→*Answer him the question.

close, open, cash, change, pronounce, prepare, fix, fill, sign, keep, translate, correct, answer, prescribe 等の動詞の文には、(2b)のように規則が適用されない。

3. 疑問文形成 (Question Formation)

疑問詞を文頭に移動する。

(3a) Will you go where?→Where will you go?

(3b) He came here when?→When did he come here?

4. Do Support

疑問文、否定文、強意表現、語順転位、接続詞 *if* を欠く節、等の場合に *do* が用いられる。

(4a) Q you speak English→Do you speak English?

(4b) Neg he likes English→He does not like English.

(4c) Emp I regret that man→I do regret that man.

B. 日本語の規則

1. 「ある」と「いる」

動物でない物は「ある」であり、動物は場所を表わす名詞句を伴い「いる」である。

(1a) 公園にベンチがあります。

(1b) 公園に犬がいます。

場所を表わす名詞句を伴わない場合は、動物に「ある」を使える。

(1c) あなたは何人兄弟がありますか。

二人あります。一人は青森に居、もう一人は広島に居ます。

2. 「と」(Exhaustive) と「や」(Non-exhaustive)

(2a) 猫と犬と家鴨を飼っています。

(2b) 猫や犬や家鴨を飼っています。

「と」はそこに述べるものだけであり、「や」はその他にもある場合である。

3. 「なくて」と「ないで」

(3a) 彼は医者ではなく(て)技師です。

(3b) あのおすもうさんは強くなく(て)弱いです。

(3c) 彼女は東京へ行かないで大阪へ行った。

(3a)は名詞(医者)、(3b)は形容詞(強い)、(3c)は動詞(行く)である。品詞に関係なく、理由を表わすものは次のように「なくて」である。

(3d) 弟が勉強しなくて困った。

(3e) 彼女が来なくて残念だった。

4. が—の交替

埋め込み文の主語は「が」であるが、「の」でも正しい。

(4a) これは弟が／の描いた絵です。

(4b) 福田首相が／のやめたというニュースを聞いて驚いた。

5. 「かい」と「だい」

「かい」も「だい」も親しい人の間で用いられるのであるが、「かい」は疑問詞のない疑問文、つまり、「はい」、「いいえ」で答えられる疑問文に用いられ、「だい」は疑問詞を伴う疑問文に用いられる。そして「だい」は形容詞、動詞の次では「のだい、んだい」の形で用いられる。

(5a) お酒を買って来るかい。

(5a') お買を買って来るの／んかい。

- (5b) *いつお酒を買って来るだい。
- (5b') いつお酒を買って来るの／んだい。
- (5c) 彼の家は遠いかい。
- (5c') 彼の家は遠いの／かい。
- (5d) *彼の家はどの位遠いだい。
- (5d') 彼の家はどの位遠いの／だい。
- (5e) これは猫かい。
- (5e') これは猫なの／んかい。
- (5f) これはどこの猫だい。
- (5f') これはどこの猫なの／んだい。
- (5g) 太郎は親切かい。
- (5g') 太郎は親切なの／んかい。
- (5h) 誰が親切だい。
- (5h') 誰が親切なの／んだい。

動詞の現在形もしくは過去形の次に「かい」、「のだい」が来なければならない。

- (5i) *散歩に行こうかい。
- (5i') *どこまで散歩に行こうのだい。
- (5j) 散歩に行く／行ったかい。
- (5j') どこまで散歩に行く／行ったのだい。

6. 数量詞 (Quantifier) と否定 (Negation)

Jackendoff (1972) は、Klima (1964) の主張する文否定 (Sentence Negation) を証明する例として次の文を挙げている。

- (1a) No one ever gave John anything.
- (1b) Nothing was ever given to John by anyone.
- (1c) Never did anyone give John anything.
- (1d) John was never given anything by anyone.
- (1e) It is not so that anyone ever gave John anything.

(1a)～(1d)は(1e)と同義であることから、(1a)～(1d)の否定文は文否定である。それは日本語としても同じである。

- (2a) [犬が猫を追いかけ] ない。
- (2b) [猫が犬に追いかけれ] ない。

更に Jackendoff は、Katz-Postal (1964) が述べた次の(3)と(4)の深層構造が異なるという仮説によると、文否定(3)と動詞句否定 (VP Negation) (4)が考えられるとしている。

(3) Not many of the arrows hit the target (*, but many of them hit it).

(3') 的に当たった矢は多くなかった (*が、それに当たった矢も多かった)。

(4) Many of the arrows didn't hit the target (, but many of them hit it).

(4') 的に当らなかった矢は多かった (が、それに当たった矢も多かった)。

日本語を考えてみても、やはり(3)と(4)は意味が違う。そして、次の文否定の文(5)は(3)と同じ意味であるが、(4)と同じ意味ではない。

(5) It is not so that many of the arrows hit the target.

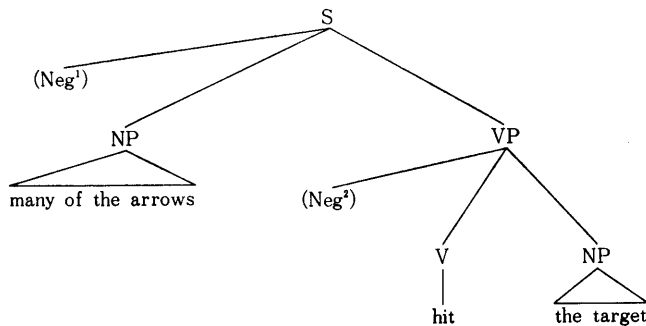
(5') 的に当たった矢が多かったという訳ではない。

更に、次の受動文(6)は(3)と同じ意味である。

(6) The target wasn't hit by many of the arrows (*, but it was hit by many of them).

Jackendoff は、(4)の意味に相当する受動文がないことから、(3)と(4)の深層構造の違いを次のように Neg¹ (3の文)と Neg² (4の文)にしている。彼は“Some of the men saw something”を例にしているが同じことである。

(7)



どうして(4)のような動詞句否定の受動文がないのか、又、受動文がありながらその能動文のない文(例えば“Many of the demonstrators weren't arrested by the police”のような文)がどうして出来るのかを、Jackendoff は動詞句否定を設定することにより解決しているのだが、本当に動詞句否定が必要なのだろうか。この論文では、数量詞と否定の問題を、日英両言語を比較しながら議論を進める。数量詞と否定に関する限り、日英両言語がかなり似ていると思われる。比較の問題はどちらかの言語から入り、それをもう一方の言語にあてはめてみるのであるが、どちらから入っても結果は同じであらう。文否定と動詞句否定の設定は英語を分析する為の手段であり、日本語はあくまでも文否定であると云えよう。従

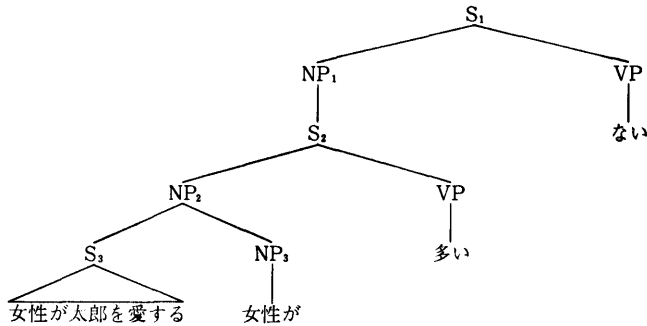
って、この問題に関する限り日本語から入り、それに相当する英語の深層構造と表層構造を考え、両言語とも同じ意味か見てみる。まず英語では文否定と呼ばれている文を日本語から入り、その深層構造を考える。

A. 文否定

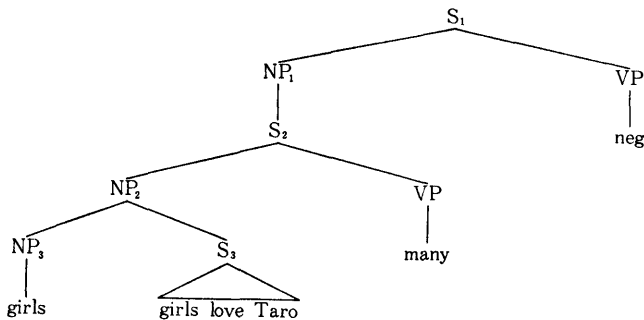
(1) 太郎を愛する女性は多くない (*が、彼を愛する女性も多い)。

(1)の深層構造は(2)となる。

(2)



関係節化により NP₂ が「太郎を愛する女性が」となり、文上昇、主題化で「太郎を愛する女性は多くない」となる。日本語の深層構造を英語に当てはめてみると(3)になる。これは Lakoff (1971) の述べた深層構造と同じであると云って良い程似ている。



Lakoff は、文否定では *not* が *many* を支配 (command) し、動詞句否定では *many* が *not* を支配するとしている。これは筆者の考えと一致する。(3)の深層構造に日本語のように関係節化、文上昇等の規則を適用し、更に *there* で書き換えると(4)となる。

(4) [[girls [girls love Taro]] many] not→[girls [who love Taro] many] not→
girls who love Taro are not many→There are not many girls who love Taro (*,
but there are many girls who love him).

(1)と(4)は同じ意味であり、更に(1)、(4)と同じ意味である(6)を派生するには(3)の深層

構造に (5a)～(5d) に述べる変形規則を適用しなければならない。

(5a) 先行詞削除 (Antecedent Deletion)

[[girls [girls love Taro]] many] not→[[girls love Taro] many] not.

(5b) 文上昇 (Sentence Raising)

(5c) 数量詞付加 (Quantifier Attachment)

[[girls love Taro] many] not→[many girls love Taro] not.

(5d) 否定辞挿入 (Negative Insertion)

[many girls love Taro] not→not many girls love Taro.

数量詞が付加されるのは *girls* であって *Taro* ではない。これは、先行詞 *girls* が削除されても、当然それと同じ名詞句に数量詞 *many* が付加されるべきなので、問題はないであろう。*neg* はそれが支配する一番近い文の動詞を否定するので、*many* を否定し *love* は否定しない。従って、否定辞は *many* に付加する。(5a)～(5d)の規則を適用して次の文が派生される。

(6) not many girls love Taro (*, but many girls love him).

(2)と(3)の深層構造の S_3 に、受動化変形規則を適用した文を考えてみよう。

(7) *太郎が愛される女性は多くない。

(7)の文が深層構造に一番近いのだが、日本語としておかしいのは、受動文の行為者が先行詞の名詞句と同一である場合、(8)と(9)にみられるように、関係節化変形はうけないからである。しかし、(10)は受動文の行為者と先行詞の名詞句が同一でないので、英訳の観はあるが正しい。

(8) *花子が本を与えられた太郎

(9) *花子が箱を壊された太郎

(10) 花子が太郎によって与えられた本

従って、(7)に相当する日本語としては(11)と(12)が考えられるが、(11)よりは(12)の方が自然である。

(11) ?太郎が愛してもらえる女性は多くない。

(12) 太郎が愛されるのは多くの女性によってではない (*が、彼が愛されるのは多くの女性によってでもある)。

(4)に従って、 S_3 に受動化を適用した文から次の文が派生される。

(13) [[girls [Taro is loved by girls]] many] not→[[girls Taro is loved by (=by whom Taro is loved)] many] not→girls Taro is loved by are not many→There are not many girls Taro is loved by (*, but there are many girls he is loved

by).

(13)と同じ意味である(15)を派生するには、(3)の深層構造に、(14)に述べてある規則が適用される。

- (14) a. 受動化 (Passivization)、b. 先行詞削除、c. 文上昇、d. 数量詞付加、
e. 否定辞挿入

否定辞挿入は、*Taro is loved by many girls* の文に挿入されるので、否定辞に一番近い動詞とは *is* であって *many* ではない。

- (15) *Taro is not loved by many girls* (*, but he is loved by many girls).

深層構造では、*many* が *neg* に一番近い動詞句である為、*not* が *many* に付加すると次の文になる。

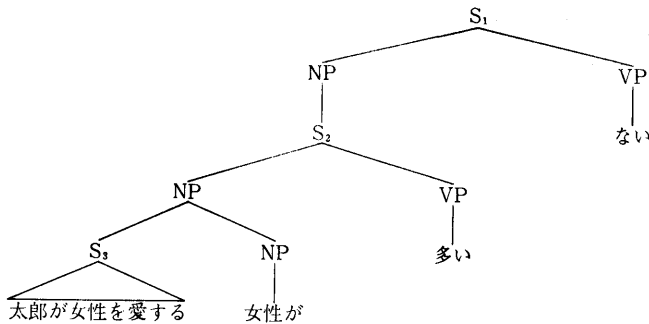
- (16) *?*Taro is loved by not many girls.*

ほとんどの人は(16)を(15)と同義には取らないであろうし、(16)が正しいとすれば *Taro is loved by (a) few girls* の意味で正しい。もし(16)が(15)の意味で正しいとするならば、否定辞は、支配する文の一番近い(つまり一番左にある)動詞句に付加されるのに加え、否定辞挿入規則は随意的に周期前(Pre-cyclic)であらねばならない。つまりこの場合、否定辞挿入規則には規則の適用順序がないということになる。従って、*neg* が直接支配する S_2 の VP は *many* であるので、他の規則が適用される前に *not* が *many* に付加されると考えなければならない。もう一文否定の文を見てみよう。

- (17) 太郎が愛する女性は多くない (*が、彼が愛する女性も多い)。

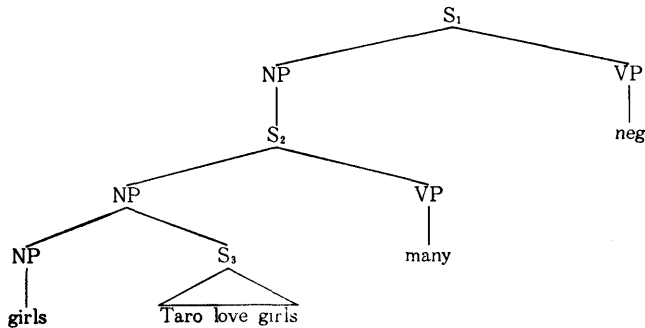
(17)の深層構造は次のようである。

(18)



英語文も(18)の深層構造と似ていると考えられる。

(19)



(19)の深層構造から(20)が派生される。

(20) [[girls [Taro love girls]] many] not→girls (whom) Taro loves are not many→
There are not many girls (whom) Taro loves (*, but there are many girls (whom)
he loves).

but..... 以下の文は、neg が S₂ を否定しているにもかかわらず、S₂ を肯定しているの
で非文となる。このことは(20)と同義文である(22)でも同じである。(19)の深層構造に(21)
に述べる規則を適用して(22)の文を派生する。

(21) a. 先行詞削除、b. 文上昇、c. 数量詞付加、d. 否定辞挿入

(22) Taro does not love many girls (*, but he loves many girls).

否定辞挿入規則に、前述のように規則の適用順序がないのであれば、最初に適用し、次の
文が派生出来る。

(23) *?Taro loves not many girls.

(18)の深層構造の S₃ に受動化規則を適用した日本語の文は(24)となる。

(24) 太郎に愛される女性は多くない (*が、彼に愛される女性も多い)。

(19)の深層構造から(25)の文が派生されるが、(26)の規則を適用した場合は、(27)の文が
派生される。

(25) [[girls [girls are loved by Taro]] many] not→girls who are loved by Taro
are not many→There are not many girls who are loved by Taro (*, but there
are many girls who are loved by Taro).

(26) a. 受動化、b. 先行詞削除、c. 文上昇、d. 数量詞付加、e. 否定辞挿入

(27) Not many girls are loved by Taro (*, but many girls are loved by him).

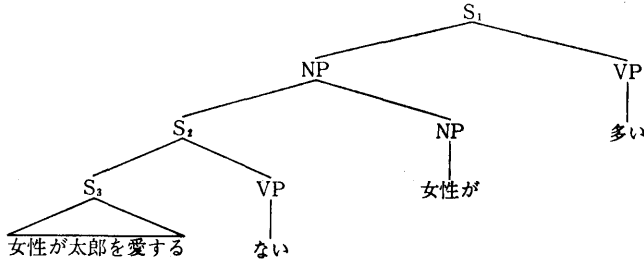
以上、文否定、つまり、否定辞が数量詞を支配する例を見てきたが、文否定の場合は、能
動文があればそれに対する受動文があり、受動文があればそれに対する能動文がある。

B. 動詞句否定

動詞句否定とは、数量詞が否定辞を支配している場合であり、それは日本語から分る。

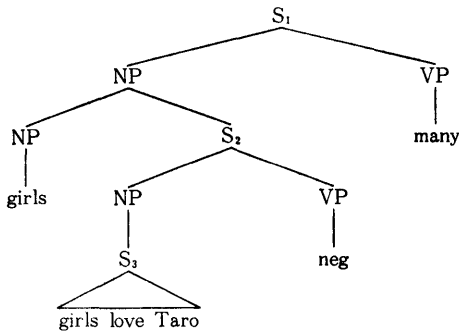
(1) 太郎を愛さない女性が多い (が、彼を愛する女性も多い)。

(2)



(2)の深層構造に、否定辞挿入、関係節化、主題化、文上昇の規則を適用すると、(1)の文が派生される。(2)の日本語の深層構造にならうと、英語の深層構造は(3)となる。

(3)



(3)の深層構造から(4)の文と、(5)に述べている規則を適用することによって、(6)の文が派生される。

(4) [girls [[girls love Taro] not]] many → girls [girls do not love Taro]] many →
girls who do not love Taro are many → There are many girls who do not love
Taro (but there are many girls who love him).

(5) a. 否定辞挿入、b. 先行詞削除、c. 文上昇、d. 数量詞付加

(6) Many girls do not love Taro (but many girls love him).

否定辞が *girls love Taro* だけを支配しているので、 S_3 だけに *not* が挿入され *many* には付加しない。従って、日本語も英語も *but.....* 以下の文も正しい。

深層構造の S_3 に受動化規則を適用した文を考えてみよう。(7)の文は前にも述べたように、受動文の行為者が先行詞の名詞句と同一である為、日本文としてはおかしい。更に、(8)よりも(9)の方が自然であるようだが、(9)も否定の受動文である為おかしい感じがする。

(7) *太郎が愛されない女性が多い。

(8) ?太郎が愛してもらえない女性が多い。

(9) ?太郎が愛されないのは多くの女性によってである (が、彼が愛されるのも多くの女性によってである)。

(3)の深層構造の S_3 に受動化規則を適用して、次の文が派生される。

(10) [girls [[Taro is loved by girls] not]] many→[girls [Taro is not loved by girls]] many→girls Taro is not loved by (=by whom Taro is not loved) are many→There are many girls Taro is not loved by (, but there are many girls he is loved by).

又、(3)の深層構造に(11)の規則を適用すると、(12)が派生される。

(11) a. 受動化、b. 否定辞挿入、c. 先行詞削除、d. 文上昇、e. 数量詞付加

(12) Taro is not loved by many girls.

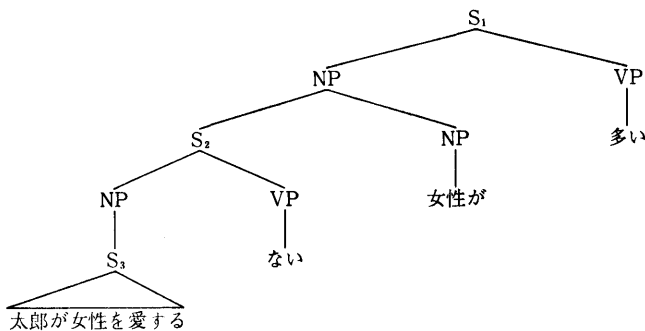
しかし、(12)の文は、前に文否定の所で述べたように、文否定の *Not many girls love Taro* の受動文であって、動詞句否定文 *Many girls do not love Taro* の受動文ではない。

(4)に対して(10)の文があるのに、(6)に対する文がないのは、数量詞が否定辞を支配している文に於いては、数量詞が否定辞の後に来れない為である。つまり、数量詞 *many* が付加されるのは *not* の前の名詞句にである。*Taro is not loved by girls* に *many* が付加されるのは *girls* であるべきなのだが、*girls* は *not* の次に来ているので、数量詞付加規則は適用されない。従って、(11)の規則を適用する受動文は存在しないことになる。

もう一つ、動詞句否定の能動文とその受動文を見てみよう。

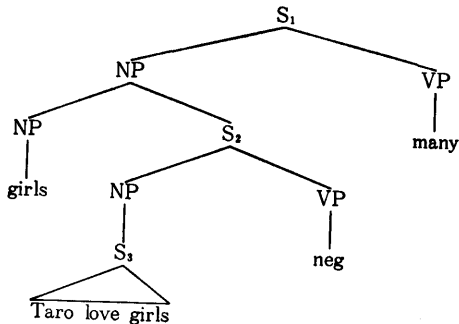
(13) 太郎が愛さない女性が多い (が、彼が愛する女性も多い)。

(14)



(14)に相当する英語の深層構造(15)から、(16)の文が派生される。

(15)



- (16) [girls [[Taro love girls] not] many→[girls [Taro does not love girls]] many→
girls (whom) Taro does not love are many→There are many girls (whom) Taro
does not love (, but there are many girls (whom) Taro love).

(15)の深層構造に(17)の規則を適用すると、(18)の文になる。

(17) a. 否定辞挿入、b. 先行詞削除、c. 文上昇、d. 数量詞付加

(18) Taro does not love many girls.

前にも述べたように、*many* は *not* の後の名詞句 ((18)の文の場合は *girls*) に付加されない。つまり、(18)の文は、(15)の深層構造に(17)の規則を適用して派生されたものではなく、文否定の文である。

日本語の文(13)の受動文は次のようである。

(19) 太郎に愛されない女性が多い (が、彼に愛される女性も多い)。

(16)と同義の文は次の(20)である。

- (20) [girls [[girls are loved by Taro] not]] many→[girls [girls are not loved by
Taro]] many→girls who are not loved by Taro are many→There are many girls
who are not loved by Taro (, but there are many girls who are loved by Taro).

(15)の深層構造に(21)の規則を適用したら、(22)の文が派生される。

(21) a. 受動化、b. 否定辞挿入、c. 先行詞削除、d. 文上昇、e. 数量詞挿入

(22) Many girls are not loved by Taro (, but many girls are loved by him).

(22)の場合は、*many* が *not* の前に来ているので正しい動詞句否定の文である。このように、動詞句否定には、能動文があってもその受動文がなかったり、受動文があってもその能動文がなかったりする。

C. 関連問題

動詞句が否定辞を支配している文、つまり、動詞句否定の文に於いては、否定文の後にその肯定文が可能であることを述べてきた。しかしそれは、主文の主語が「多くの人」とか

「少数の人」のように同一の人物を指さない場合である。次の(1)と(2)では、望むのは一個人あるいは一団体である為、後に肯定文が来れない。

- (1) 私はあなたが試験を受けないのを望む (*が、あなたが試験を受けるのも望む)。
- (1') I want you not to take the exam (*, but I want you to take the exam).
- (2) 皆はあなたが試験を受けないのを望む (*が、あなたが試験を受けるのも望む)。
- (2') All people want you not to take the exam (*, but they want you to take the exam).
- (3) あなたが試験を受けないのを望む人は多い (が、あなたが試験を受けるのを望む人も多い)。
- (3') Many people want you not to take the exam (, but many people want you to take the exam).

しかし、ある事柄が真である事を仮定して云う時に用いる動詞 (Factive verbs) が否定辞を支配している文に於いては、その事柄が否定か肯定かのどちらか一つである。つまり、次の文(4)に於いて、ある一つの事柄について云っているのであれば、()内の肯定文は云えないし、()内の文が云えれば、その前の肯定文は云えない。しかし、前の否定文の事柄があってから別の事柄として、後の()内の肯定文の事柄があったとしたら、()内の文も云えるであろう。

- (4) 太郎が試験を受けなかったのを残念に思っている人は多い (が、彼が試験を受けたのを残念に思っている人も多い)。
- (4') Many people regret for Taro not to have taken the exam (, but many people regret for him to have taken the exam).

次に否定辞上昇 (Negative Raising) を見てみよう。(5)と(6)は同義であるが(7)は同義ではない。

- (5) 太郎が試験を受けないと信じている人が多い。
- (5') Many people believe Taro not to take the exam.
- (6) 太郎が試験を受けると信じていない人が多い。
- (6') Many people do not believe Taro to take the exam.
- (7) 太郎が試験を受けると信じている人は多くない。
- (7') Not many people believe Taro to take the exam.

(5)の文に否定辞上昇規則が適用されて(6)が派生されるのだが、更に否定辞を上昇して(7)を派生することは出来ない。(5)と(6)は動詞句否定の文だが、(7)は文否定の文である。否定辞上昇規則は数量詞を越えて適用出来ないのである。

7. お わ り に

以上、日本語から英語を見ることにより、数量詞と否定の問題を議論して来たが、英語から日本語を見てももちろん結果は同じでなければならないのである。しかし、この論文で議論した数量詞と否定の問題は、日本人からすれば、英語から日本語を見るよりも日本語から英語を見ることの方が、日英両言語の問題は解決し易いのである。Lakoff のような理論を取る場合は、英語から入って日本語を見ても、全く同じような結果が出ることになる。両方の言語が共通する分析法によって究明されれば良いのであるが、比較する際に問題となる点は、どちらか一方の言語に他の言語を当てはめてしまうことである。どの言語にも他の言語にはない独自の特徴がある。それを無視した共通性の重視は危険である。他方、言語の比較に於ける重要性は、両言語に共通のもの、更には言語に普遍なものの追求にある。

A Comparative Study of Japanese and English, and Problems of Quantifier and Negation

Yasuhide KOBAYASHI

Summary

In "Semantic Interpretation in Generative Grammar," Jackendoff discusses the necessity of VP negation. For example, (1) is synonymous with (3), but (2) is not synonymous with (1) and/or (3).

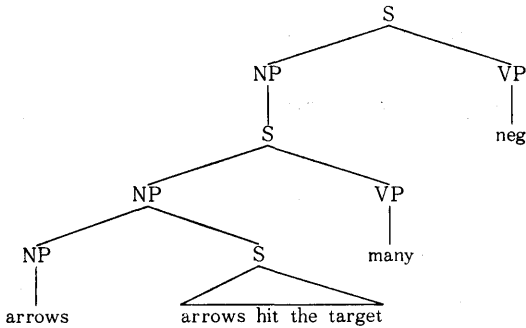
- (1) Not many of the arrows hit the target.
- (2) Many of the arrows didn't hit the target.
- (3) It is not so that many of the arrows hit the target.

And also (4) and (5) are not synonymous.

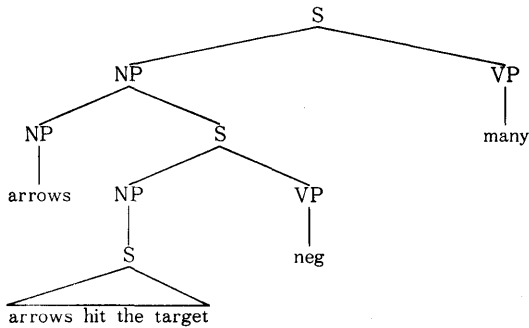
- (4) None of the men saw anything.
- (5) Some of the men didn't see anything.

But when we look at Japanese negative sentences, we find out that *neg* is a verb. Therefore, all sentences can be said to be sentence negation. Looking at Japanese sentences, we can present the underlying structures of (1) and (2) as (6) and (7), respectively. This analysis is very similar to Lakoff's (1971).

(6)



(7)



By applying Antecedent Deletion, Sentence Raising, Quantifier Attachment and Negative Insertion rules to (6), we can derive the sentence (1), and by applying Negative Insertion, Antecedent Deletion, Sentence Raising and Quantifier Attachment rules to (7), we can derive the sentence (2). If we derive sentences in these ways, we can solve the problem that there is no synonymous passive to an active sentence or that there is no synonymous active to a passive sentence. For example, the passive sentence of (1) is (8), and (8) is not the passive sentence of (2).

(8) The target wasn't hit by many of the arrows.

If *many* commands *neg* like (7), *many* cannot come after *not*. That is, *many* has to be attached to the NP before *not*. In (8), *many* is attached to *arrows* and comes after *not*. Therefore, (8) is the sentence in which *neg* commands *many*, and it is not the sentence in which *many* commands *neg*. The former is called sentence negation and the latter, VP negation. Likewise, (10) is not the passive of (9).

(9) Taro does not love many girls.

(10) Many girls are not loved by Taro.

The passive of (9) is (11), and there is no active of (10) because *many* commands *neg* in (10) and *many* cannot come after *not*.

(11) Not many girls are loved by Taro.

We conclude that all negative sentences are sentence negation and the difference between sentence negation and VP negation is whether a quantifier commands *neg* or *neg* commands a quantifier.

参 考 文 献

- 井上和子. 1976. 『変形文法と日本語 上、下』大修館。
———. 1978. 『日本語の文法規則』大修館。
岩倉国浩. 1974. 『日英語の否定の研究』研究社。
小林泰秀. 1978. 「受動態と様態の副詞」『広島女学院大学論集』第28集。
Jackendoff, Ray. 1972. *Semantic Interpretation in Generative Grammar*, The MIT Press, Cambridge, Mass.
Katz, Jerrold, and Paul M. Postal. 1964. *An Integrated Theory of Linguistic Descriptions*, The MIT Press, Cambridge, Mass.
Kiparsky, Paul, and Carol Kiparsky. 1970. "Fact," in M. Bierwisch and K. E. Heidolph, eds., *Progress in Linguistics*, Mouton & Co., The Hague, pp. 143-173.
Klima, Edward S. 1964. "Negation in English," in J. J. Katz and J. Fodor, eds., *The Structure of Language*, Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs, New Jersey, pp. 264-323.
Lakoff, George. 1971. "On Generative Semantics," in D. D. Steinberg and L. A. Jakobovits, eds., *Semantics: an interdisciplinary reader in philosophy, linguistics, anthropology and psychology*, Cambridge University Press, Cambridge, Mass., pp. 329-340.
———, and Stanley Peters. 1966. "Phrasal Conjunction and Symmetric Predicates," *Mathematical Linguistics and Automatic Translation*, Harvard Computation Laboratory, Report No. NSE-17, pp. VI-1 to VI-49, also in D. A. Reibel and S. A. Schane, eds., *Modern Studies in English*, Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs, New Jersey, 1969, pp. 113-142.